

平成19年9月1日

49武陽会各位

49武陽会45周年記念同窓会

代表幹事 山口 道生

拝啓、皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

さて、45周年記念同窓会のご案内状を8月10日付で出状致しましたが、届きましたでしょうか。ぜひ参加と記入されて9月末日までに投函ください。投函頂いたご返事は今回はクラス幹事の元に集められますのでよろしく願います。

私は今回の代表幹事を仰せつかりましたが、昨年11月までは奈良市、12月からは広島県福山市と神戸からは少し遠隔地に住む事となり、今回の記念同窓会でお役にたつことも少なく、神戸在留のクラス幹事の皆様のご支援によりここまで漕ぎ着けることができました。本当にありがとうございます。

ぜひ11月10日には皆々様と久しぶりに再開できることを楽しみに致しております。ご出席のお返事をお待ち致しております。

なお、我らの故郷「神戸」について司馬遼太郎氏の「街道をゆく」の「神戸散歩」編で次の様な記述がありますので、ご紹介させていただきます。

神戸は横浜とともに、日本の大都会のうち、例外的に江戸期の城下町の伝統がない。1868年1月1日に開港し、都市化した。最初は、港の港長までも御雇外国人の英国人だった。さらに海岸の砂地に外国人居留地ができ、やがて山手に雑居地が成立して、都市としての原形をなした。この点、祖型は外国人がつくったにひとしい。(中略)神戸の居留地のもととは、例えば、生田川の河口付近の泥と砂の低湿地である。これを埋め立て、盛り土をし、碁盤状に区画し、一番、二番と番号をふり、逐次建物がたつことによってできた。この居留地にあつては、まだ建物もろくに建っていない明治元年11月13日、この地を使用するひとびとがあつまって自治会をひらき、一街路樹を植えよう。と提議された。このことが、数が月後に実現された。遊歩地のために芝生もうえられた。二十年後には、この居留地は建物と緑がよくつりあって、公園のような都市美観をもつようになった。ここで神戸の原形が成立したというべきだが、ただ、当時、居留地をとりまく日本人の市域は、きたなかつたらしい。そのころの日本人にとって、目の前の居留地こそ都市思想の見本であると考えするには、素地がなすすぎたのであろう。神戸が、市も市民も一つの思想のもとに都市建設をするようになるのは、第二次世界大戦で焼かれてからのことである。もっとも、空襲で焼かれたという点では、名古屋や福岡といった他の都市もそうだったが、しかし復興と建設の結果、神戸のようにならなかつたのは、まちの祖型についての記憶が神戸と異なっていたからにちがいない。さらには、神戸においては、自分の都市の祖型を尊敬するという開明的な一もしくは居留地や山手に異人館の美観についての憧憬心が一市民の共通の気分のなかに息づいていたからかと思える。